



(愛されし者)

トニ・モリスン

吉田廸子・訳

BELOVED



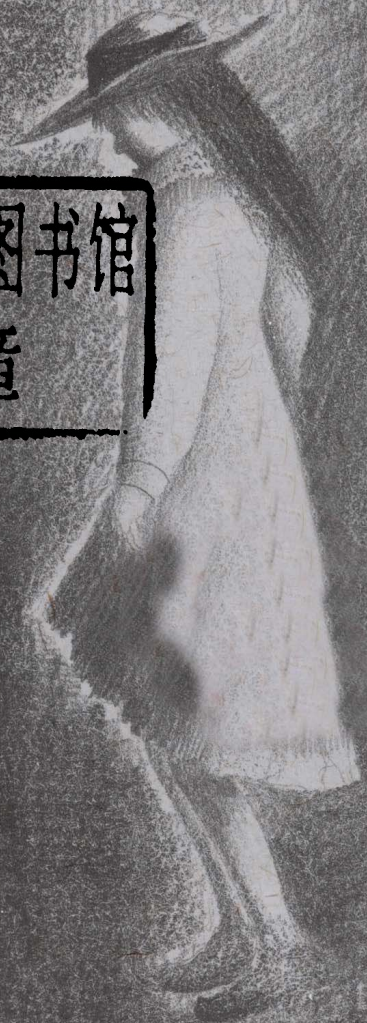
上

ボド (愛されし者) 上

トニー・モリスン

吉田 勉子・訳

工業学院図書館
藏书章



TONY MORRISON

BELOVED
by Toni Morrison
Copyright © 1987 by Toni Morrison

Japanese translation rights arranged with Toni Morrison
c/o Rogers, Coleridge & White Ltd., London
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

ビラヴ(上)

一九九〇年一月二五日 第一刷発行

著者 トニ・モリスン

訳者 吉田 遼子
よしだ りょうこ

発行者 若菜 正

発行所 株式会社集英社

一〇一五〇 東京都千代田区一ツ橋二一五—一〇

電話 編集部 (〇三) 二三〇一六〇九四

販売部 (〇三) 二三〇一六三九三

製作課 (〇三) 二三〇一六〇八〇

印刷所 図書印刷株式会社

© 1990 Shueisha

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。送料小社負担でお取り替えます。

ISBN4-08-773120-0 C0097

ビラヴド（上）

愛されし者

装 装
画 幀
司
修

六千万有余の人々へ

(三百年にわたるアメリカ

合衆国の奴隷制の暴虐によ

つて死んでいった黒人の数)

わたしは、わたしの民でなかったものを、わたしの民と呼び、
愛されなかった者を、愛されし者と呼ぶだろう

第一部

一二四番地は悪意に満ちていた。赤ん坊の恨みがこもっていた。

その家に住んでいる女たちはそのことを知っていたし、子供たちだって同じだった。何年ものあいだ、それぞれが、その悪意にじっと耐えてはきたものの、一八七三年には、まだ残っていた被害者はセスと彼女の娘のデンヴァーだけになっていた。

祖母のベビー・サッグスは死んでいたし、息子のハワードとバグラーは十三歳になる前に逃げて出していた。覗きこんだだけで鏡が粉々に砕けたとたん（これでバグラーの心が決まり）、二つのちっちな手型がケーキの上に現れたとたん（これでハワードの決心もついて）二人は逃げ出したのだ。息子たちはそれ以上の異変が起きる前に、家出を決行した。鍋一杯分のヒヨコ豆がこんもりと小さな山になって、床の上で煙を上げているのを二度も目撃したり、ソーダクラッカーの屑が敷居にそって直線に撒^{*}かれているのを、見つけたりするまでぐずぐずしてはいなかった。二人とも中休みの時期がめぐってくるのも待たなかった。何週間、いや何カ月もが、平穩無事に過ぎる時期もあるにはあったのだ。しかし待つことなど論外だった。二人とも即座に逃げ出した。

それぞれ、この家がしでかす無礼な行為にこれ以上我慢できないし、二度と見たくないと思つて、時を移さず逃げ出したのだ。二カ月と間をおかず、冬のさなかに、祖母ベビー・サッグス、母親セス、妹デンヴァーを、ブルーストーン通りの白灰色の家に置き去りにして出ていったのだ。シンシナティはまだそれほど大きな街になつていなかったから、当時この家には番地がなかった。最初に兄の方が、次に弟が、帽子の内側に綿を詰めこみ、靴を摺んで、彼らに悪意をむきだしにする家から忍び足でぬけだした時、そこはオハイオ州になつてから、わずか七十年しかたつていなかった。

ベビー・サッグスは頭を上げることさえしなかった。

病床で二人が出ていく気配を聞きながら、身じろぎもしなかったのは、耳をすましていたせいではなかった。人が住むすべての家が、ブルーストーン通りの自分たちの家とは、似たようなものではないらしいと、孫たちが気づくのにこれほど長くかかったことが、彼女には、かえつて不思議だった。吐き気をもよおすような人生と、死んだ者たちの悪意のあいだで、立ち往生したまま、ベビー・サッグスは人生を去る気力も、さりとて生きる気力も持てなかったから、まして、忍び足で去っていく少年たちの恐怖を、思いやる気にもならなかった。彼女の過去は彼女の現在と似たようなものだった。つまり、思い出すのも耐えがたいということにつきた。しかも、死はけつして忘却などもたらさないことを知っていたので、彼女は自分に残されていたわずかな命のはむらを、色彩を眺めることに費やした。

「もしあれば、ラベンダー色を少し持ってきておくれ。なけりや、ピンクがいいね」

こう言われるとセスは、布切れを捜すことから自分の舌の色を見せることまでして、労を厭わず姑の望みを叶えてやった。色彩を愉しみたいものにとつて、オハイオの冬は、とりわけ荒涼としていた。天空が、唯一のドラマを提供した。シンシナティの地平線に目を注ぎ、生命の歓喜に出合いたいなどと期待するのは、実に無謀な行爲だった。そんなわけでセスと小さな娘のデンヴァーは、自分たちでできる範囲のことを、ベビー・サッグスにしてやった。母と娘は一つになつて、この家の不埒千万な所業に、その場しのぎの対処をした。ひっくり返されたおまる、人の尻をピシャリと叩く見えない手、すえた臭いのする突風と戦った。抗戦に熱がこもらなかったのは、この乱暴な行爲の出所が、光の源が明らかであるように明々白々だったからだ。

兄弟が出ていつて間もなくベビー・サッグスが死んだ。二人が家を捨てたことにも、自分がこの世を去ることにも、いっさい関心を示さないままで、彼女が逝つてすぐ、セスとデンヴァーは、自分たちをこれほどまでに苦しめている幽霊を召喚し、迫害騒ぎを終わらせようと決心した。話し合つてみたらどうかしら、と二人は考えた。意見の交換とか、何かそんなことをやつてみたら、事態は好転するかもしれない。そこで母と娘は手をつないで、こう呼んだ。「出テオイデ。出テオイデ。正々堂々、顔ヲオ見セ」

サイドボードが一步進み出たが、他に出てきたものはなかった。

「ベビーばあちゃんきつと引き止めてるんだ」デンヴァーが言った。彼女は十歳だったが、ベ

ビー・サグズが死んだことに、まだ腹をたてていた。

セスは目を開けた。「そうかしら？」と彼女は言った。

「だって、出てこないじゃない」

「おまえは幽霊が赤ちゃんだってことを忘れてるよ」母親が答えた。「死んだ時、二つにもなつてなかったんだもの。小さくて聞きわけがないんだよ。赤ちゃんだから口も満足にきけないんだよ」

「聞きわけたくないのかもしれない」デンヴァーは言った。

「そうね、だけど、あの子が出てきてくれさえすれば、はっきりわかるように説明してやれるのに」

セスは娘の手を放し、二人は力を合わせて、サイドボードを壁ぎわに押し戻した。表を通る馭者が鞭をあてて、馬の歩みを速めた。一二四番地の前を過ぎる時、そうしなければいけないような気になるのだった。

「赤ちゃんにしちゃ、強い魔力を出すのね」デンヴァーが言った。

「こんなもんじゃなかったわ、わたしがあの子を愛したのは」こう答えたセスの心に、またあの光景が甦^{よみがえ}った。

のみの刃が入っていない墓石の、こちらを迎え入れてくれるようなひんやりした感触。爪先立ちになって寄りかかるために彼女が選んだ墓石。彼女の膝は墓穴のように大きく開いていた。墓

石は指の爪のようなピンク地で、細く光る斑点が一面に散っていた。十分、と男は言った。十分間やらせてくれれば、無料で彫ってやろう。

七文字彫るのに十分かかった。さらにもう十分あったら「かけがえなく」という文字も彫らすることができたろうか？ あの時頼んでみようと思わなかったのだが、そうしてもらったこともできたかもしれないと考えたと、いまだに心が乱れた。二十分、もしかしたら三十分あれば、全部彫ってもらえたかもしれないのだ。葬式で牧師が言い、彼女が聞いた一語一句を残さず（しかも、そこには間違いないと言いたかったすべてがあったから）、赤ん坊の墓標に刻みこんでもらえたかもしれないのだ。

「^{「アイリ・ピラウド}かけがえなく愛されし者」

結局彼女が選び、彫ってもらったのは、^{「かんじんかなめ}肝心要の一言だった。墓標が並び立つ墓場で、犬のように石工とつがいながら、この一言で充分だろうと考えた。彼の年端もいかぬ息子がかたわらで眺めていた。その顔に浮かんだ怒りはいつもの怒りだったが、そこには初めて欲望が見えた。「愛されし者」で当然不足はないはずだ。牧師をもう一人、奴隷廃止論者ももう一人ぐらい怒らせ、嫌悪に満ちた町の人々の視線に應えるには、これで充分だ。

自身の鎮魂の成就に気を取られ、彼女はもう一つの魂のことを忘れていた。赤ん坊だった娘の魂を。ほんの小さな赤ん坊が、これほど激しい怒りを抱くことができるなどと、誰が想像しただろう。墓石に囲まれて、石工の息子が見ている前で、犬のようにつるむだけでは償い足りないか

ったのだ。喉を掻き切られた赤ん坊の怒りで半身不随にされた家の中で、命が絶えるその日まで、長い年月を生きなければならぬ、というだけではなかったのに。あの十分、星のような斑がちらばめられた暁色の石に軀からだを押しつけられたまま、膝を墓穴のように開いてすごしたあの十分間は、一生の時間より長く、彼女の指を油のように浸した赤ん坊の血糊よりも鮮明に、激しく脈打っていた。

「引越してやることもできますけど」一度姑に言ってみたことがあった。

「それでどうにかなるのかい？」ベビー・サッグスが訊いた。「死んだニグロの嘆きが天井のたる木に届くほど詰まっていけない家なんか、この国には一軒だってありやしない。うちの幽霊は赤ん坊なんで、むしろ、運がいい方だ。わしの亭主の霊がこの家に帰ってくるわけじゃなし。それにあんたの亭主の霊だってね。無駄なことは言わないでくれ。あんたは運がいいんだから。三人子供が残ってるんだからね。三人があんたのスカートを引っぱっていて、あの世からやってきて暴れるのはたった一人じゃないか。ありがたいと思わなくちゃ、そうだろう？ わしには八人いた。一人残らずわしから離れていった。四人が取り上げられて、四人が追手をかけられた。今頃は八人が八人みんな幽霊になって、誰かの家を悩まして災難に引きこんでるかもしれないね」ベビー・サッグスは眉毛をこすった。「最初に生まれた子。あの娘のことで思い出せるのは、パンの底のお焦こげがそりや好きだったってことだけさ。驚くだろう？ 八人も子供を産んで、それしか憶えていないなんてね」